

だれのため、なんのための国際交流か

門倉正美

(横浜国立大学留学生センター)

## 1. はじめに——南北逆転の世界地図が示すものとは？

「だれのため、なんのための国際交流か」と、たいへん振りかぶったタイトルをつけました。「国際交流」というと、どうしても「留学生のため」、「留学生に日本の文化や社会を知ってもらうため」というように、「留学生のためにしてあげる」という気持ちになりがちではないでしょうか。

「そうではなくて」と答えを急ぐ前に、私が横浜国立大学で担当している「異文化間コミュニケーション論」クラスのガイダンスでよく使っている世界地図を見ていただくことから始めたいと思います。この世界地図は、オーストラリアを訪ねた際に、キオスクのようなところで売っているのが目にとまり、買ってきたものです。ご覧のように、南北が逆になっています。あとは、日本の中学や高校の地図帳でよく見る世界地図とほとんど同じですね。

ガイダンスで、私はこの地図を学生たち（留学生と日本人学生が混在しています）に示して、この世界地図が物語っている「世界地図の常識」として、どのようなものがあるだろうか、と問いかけます。南北が逆転している世界地図は、いわば私たちが無意識のうちにもっている「世界地図の常識」を揺るがします。その一種のカルチャー・ショックをもとに、では揺るがされた「常識」とはどのようなものか、と問い返してほしいのです。

少し時間を与えると、学生たちからはいろいろな回答が出ます。まず、地図では「北が上」と思い込んでいる点があげられます。この答えに対しては、それでは、なぜ「北が上」が当たり前なのか、とさらに問いをすすめます。「北半球が中心と思われているから」という答えに、「どうして北半球が中心なのか」と問いを重ねます。「ヨーロッパが北半球だから」との回答に、「どうしてヨーロッパが中心となるのか」と念押しをして、「ヨーロッパがほかの国々を植民地化してきたから」という答えを得ます。

「世界地図においてヨーロッパ（西欧）が中心となっている」ことは、経度の基準点（経度零度）がイギリスのロンドンにおかれていることによく現れていますが、考えてみれば、近東、中東、極東という「東の方」の度合いも西欧から見ての「東」であることに気づかされます。

経度の基準点を自国におくという西欧の発想は、あらゆる国の世界地図に共通しています。世界地図の第二の「常識」は、当然のこととは言え、自国中心主義です。南北逆転のオーストラリアの地図の南北を元にもどせば、日本で流布している世界地図とほとんど同じ姿となるのは、オーストラリアと日本がほぼ同じ経度に位置するからにほかなりません。

「世界地図の常識」として、ほかに学生があげるのは、メルカトル図法である点、領土の主張がこめられている点（北方領土、竹島等）、国ごとに色分けされている点などです。私には、最後の点がとりわけ重要に思えます。はじめて飛行機に乗って海外に飛んで、窓の外の光景に目をこらした子どもが、「赤い国境線がどこにもない」と驚いたというエピソードがありますが、それほど、世界地図では国境、すなわち国家が強調されています。近代国家の強力な自己主張の場である点も、「世界地図の常識」の重要な側面なのです。

先ほど、オーストラリア製の南北逆転の世界地図は、見た人に一種の「カルチャー・ショック」を引き起こすと言いましたが、「地図」という日常的な図面も、ある種のものの見方・考え方がそこに刷り込まれているという点で、ある種の＜文化＞を体現しているがゆえに、その＜文化＞に違反する地図は「カルチャー・ショック」をもたらす、というわけです。

そうだとするなら、「異文化」は留学生と日本人学生の間だけにあるわけではなく、日常のありふれた事物のたまたまの中にも、いくらでも「異文化」を見ていくことができるはずだというのが、南北逆転の世界地図がガイドする「異文化間コミュニケーション」の方向です。

## 2. 異文化間コミュニケーション論クラス

私が十数年前に、横浜国立大学において「異文化間コミュニケーション論」クラスを教養教育科目として立ち上げたのは、留学生と日本人学生が心ゆくまで話し合える場をつくりたいという単純な理由からでした。日本語や日本事情のクラスで接する留学生からは、「日本人学生ともっと話しがしたい」という訴えをよく聞く一方で、日本人学生からは、「横浜国立大学は留学生が多いので、もっとたくさん留学生とつきあう場があると思っていたが、意外にそうした場が少ない」という苦情・不満をしばしば聞いていました。そこで、いっそのこと授業の場そのものを「国際交流の場」にしてしまおう、と考えたのです。

しかし、いざ始めてみると、このクラスは教養教育科目のため受講希望者が多く、最大で45人しか入れない留学生センターの教室にはとても入りきれません。そこで、私は、

先に述べた南北逆転の世界地図のように、ありふれたモノもたらす「カルチャー・ショック」についてのガイダンスを行って、そのガイダンスへの感想をふくめて、「自分にとっての異文化間コミュニケーション」について小レポートを課し、その小レポートの出来を見て、留学生15名、日本人学生30名を選出しています。

毎年、200名前後の学生たちの、そうした小レポートを読んできて、上述のような留学生と日本人学生の接点の少なさへの不満の思いをたえず再認識させられるとともに、地方出身の学生が横浜や東京にいたく「カルチャー・ショック」の重要性にもあらためて気づかされます。

思えば遠い昔、私が東京にある大学に入ってまず驚いたことは、大阪人のクラスメートが堂々と声高に話す関西弁の勢いのよさでした。全国から学生が集まるような大学は、いろいろな地方から来た学生が一堂に会する、貴重な「異文化間コミュニケーションの場」を提供してきたと言えるのかもしれませんが。

クラスでは、3人がけの机に留学生を真ん中にはさんで両側に日本人男子学生、女子学生（原則として、男子学生、女子学生を15名ずつ選出する）がすわり、あるトピックについて3人ないし6人でディスカッションすることを中心的な活動としています。はじめの1、2回は、「日本人は話したいことがあるときも、はっきり言わないのはなぜか」、「どうして電車の中で大人がマンガを読んでいるのか」といった身近なカルチャー・ギャップをテーマとして話し合います。

しかし、こうした典型的なカルチャー・ギャップを話題にすると、どうしても留学生が「私の国では〇〇だが、日本では××なのはどうしてなのか」と疑問をぶつけるのに対して、日本人学生は「それは、日本では昔から△△なので、××になっているのだと思う」というように、文化や習慣を国単位で見ていく態度を助長することになりやすい面があります。

例えば、「日本人は話したいことがあるときも、はっきり言わないのはなぜか」という疑問は、このクラスでこれまで何回か話題となってきたのですが、これに対する日本人学生の回答で多いのは、「日本は単一民族社会なので、多くを説明しなくても以心伝心でコミュニケーションできるから、あまりはっきり言わないことが多い」といった、いわゆる日本人論的な説明です。

そもそも、留学生が外国人として感じる疑問に、日本人学生が「日本人として」回答するという図式そのものが、こうした日本人論的説明を促すところがあるのかもしれませんが。

そこで、私は、身近なカルチャー・ギャップの話題は2回ほどで切り上げて、先に述べた地方から来た日本人学生自身が東京圏に来て感じた「カルチャー・ギャップ」に焦点をあてることにします。「日本もいろいろ」と題して、日本人学生がそれぞれの出身地方の良い点、面白い点について2分間発表をし、その発表の印象をもとに、挙手によるアンケートで得票が多い地方について、その発表者を中心に4、5人でグループをつくります。そして、グループでその地方についてさらに深く調べて、日本のいろいろな地域を紹介する、パワーポイント等を使ったプレゼンテーションをします。

このグループ・プレゼンテーションのねらいは、日本のある地方について、その地方の出身者を中心として、留学生と日本人学生が協力して調べ、プレゼンテーションで紹介していく過程を通じて、その地方特有の「文化」にふれ、文化を国単位でとらえる「常識」を揺さぶるところにあります。ですから、学生たちには、単なる「るるぶ」的な観光案内ではなく、その地方の独特な点、興味深い点が聞いている人によく伝わるプレゼンテーションをめざすようにとアドバイスしています。

地域はいちおう「県」単位にしていますが、長野県内の3つの地域文化の差の大きさを的確に描写した発表、長崎の原爆被爆者の平和運動の歴史についての報告、沖縄がいかにも本土の文化と違うかを実感させる報告、秋田方言で名物や昔話を語る発表、横浜の隠れた風景とその歴史を調べた報告など、留学生だけでなく、日本人学生にも「いくつもの日本」があることを気づかせる、力のこもったプレゼンテーションがいくつもありました。

このクラスでは、コース後半は「〇〇と異文化間コミュニケーション」という枠組みの中で、受講者たちから「〇〇」の部分を選び、やはり人気投票的にアンケートによってトピックを決めてグループ分けをして、期末のプレゼンテーションにすすめていきます。

### 3. だれのため、なんのための国際交流か

これまでの異文化間コミュニケーション論クラスの話をつまえて、「だれのため、なんのための国際交流」という本題に入りましょう。「だれのため」という点について言えば、留学生と日本人学生双方が相手との深いコミュニケーションを求めて、クラスに参集したのでした。「交流」とは本来そういうものではないでしょうか。「してあげる」のではなく、「したい」からする、というところに原点があるのだと思います。

「なんのため」という点への私なりの回答は、南北逆転世界地図を示すガイダンスのところにあります。「国際交流」とは「異文化間交流」ですが、「異国」の人たちとのコミュ

ニケーションは、「異文化」すなわち「文化の異なり」がとりわけ際立つ場面ではありますが、国単位の文化の違いだけが「異文化」ではないし、さらに言えば、国単位の文化の違いを特権化してはならない、と思います。むしろ、南北逆転地図によって、意識下にひそむ「地図の文化」の顕彰化・意識化に、国文化の違いを超えてともに<驚く>（「カルチャー・ショック」を受ける）という体験のほうが重要です。

異文化間コミュニケーションクラスで、日本の地方の独自性を再認識する作業を留学生と日本人学生がともにしていくことを促すのも、「国文化の単一性」という「常識」を崩す作業であるとも言えるでしょう。

したがって、「だれのため、なんのため」という設問への答えは、「交流する両当事者のため」であり、また、文化を同じくする者のあいだで無意識下に蓄積されている「常識的なものの見方・考え方を揺さぶるため」ということになるでしょう。

#### 4. 今、日本国民であることの国際的責任

国際交流の場において国単位の文化の違いを特権化してはならないと申したばかりですが、その半面、グローバル化が進展する現在の世界状況における「日本国民としての責任」といったことにも目を向ける必要があると思いますので、その点について最後に付け加えておきたい、と思います。

先の戦争への反省の念からか、ナショナリズムを声高にあおる言論にたいする警戒心は憲法第9条の遵守をおおむね首肯する態度とともに、日本国民の多数派に共通していると思います。しかし、そうしたナショナリズムへの不安・不信の思いが、日本国の国際的なプレゼンスに目をつむるという態度につながってはならない、と思います。

まず日本国民の多くは、「日本は小国である」と思う傾向があるように思いますが、いかがでしょうか。「日本」という国称自体が、中国から見て「日の本（元）」（つまり東）に位置するという意味からきていることが表しているように、大雑把に言って、古代から江戸時代まで日本は中国と対比して自国を意識していた気味があるように思います。また、明治以降は「脱亜入欧」、そして戦後は「脱亜入米」となり、ヨーロッパやアメリカと対比するようになります。中国もアメリカも大きな国であり、それらと比べれば当然、日本は「小国」と言わざるを得ません。

しかし、表でお示しするように、人口は世界で第10位であり、欧米のいわゆる「先進国」の中ではアメリカに次いで第2位です。また、ODA拠出額は、現在は第3位ですが、

2000年までは第1位でした。軍事費の算定にはいろいろな基準があり、それによって順位は動くようですが、一つの統計では、米、中、ロに次いで第4位です。GDPがアメリカに次いで第2位なことは、よく知られている事実です。

私は別に、「日本は大国である」と主張したいわけではありません。そうではなく、経済、人口、軍事面での、日本の国際的なプレゼンス（存在感）に国民が無自覚であってはいけないのではないか、と言いたいのです。

次に「日本は島国である」という日本人論の言説が、「日本は世界に開かれていない」、あるいは「日本は世界に開かれなくても、自存できる」といった思い込みを生んでいるのではないかと危惧していますが、この点はどうでしょうか。

食料自給率が40パーセントを切りそうだという統計はよく知られていますが、それがどれくらい危機的なことなのかという点については、あまり認識されていないように思います。この表を見ると、フランス、ドイツ、イギリスなどのヨーロッパ諸国が1970年代以降着々と食料自給率を上げてきているのに対して、日本が60パーセントから40パーセントへと減らしてきていることが、はっきり示されています。エネルギー自給率となると、わずか4パーセントにすぎず、劇的に他国に依存している状態です。また、1990年代以降、労働力の外国人依存度も右肩上がりに増大しています。

これら3つの統計は、日本経済・社会が国際経済の流通と国際的な労働力の移動に依存して成り立っていることを端的に表しています。私は、食料やエネルギーの自給率については高める方策を積極的にとっていくべきだと考えますが、人的な移動については、日本の国際的な位置からして、受け入れ増大を認めることが筋であると考えています。

「日本国民の国際的責任」という視点で、これらの統計を概観したのは、日本という国の国際的な位置（プレゼンス）を冷静に見極めて、それに相応しい役割を果たすべきだと考えるからです。その際に、いかにして排外的・民族主義的なナショナリズムに陥らずに、人権と多様な価値観を抑圧しない、開かれた社会として国際的に貢献し得るかが問われることになるでしょう。「だれのため、なんのための国際交流か」という練習問題の解答は、最終的にはそうした方向に求めていくべきだと思います。